

私が育む想い、希望、そして夢 福智に生きる



人々 画家・さやのりこさん

「脊髄係留症候群」という難病と闘いながら、絵をとおして多くの人に癒しと希望を与えている福智町在住の画家・さやのりこさん。美しく躍動感あふれる作品の根底には、福智町の自然の美への感謝と、これまで出会った人、そしてこれから出会う人を慈しむ温かい愛が旋律のように流れています。



キャンバスに向こうに、希望の光を届けたい。

ゆっくりとその手に筆をとり、静かにキャンバスに向き合います。鮮やかな色がのせられると、下絵の花や蝶たちが、まるで躍動するかのように生き生きと浮かび上がってきました。

20代のときからエステティシャンとして女性の肌と心を癒していたさやのりこさん。しかし突然36歳で「脊髄係留症候群」という難病を発症、手足が自由に動かない生活が始まりました。「もう人を癒せない。それが何より辛かった」。

絵筆をとったきっかけは、知人の「生きた証を残して」という言葉。「昔から絵は好きでしたら、もう上手に描けないと思っていました。病気になって最初に絵を描いたときは、仕上がりに納得できず『私の絵じやない』と泣いてしまったほど」と当時を振り返ります。

それでも、「絵を待っている人がいる」という思いが沸き起こり、つき動かされるように描き続けたさやさん。インターネット上の交流サイトに発表した作品が大きな反響を呼び、国内外で瞬く間に広がりました。現在は全国各地で個展を開催するほか、作品はペルーの美術館にも所蔵されています。

色鮮やかな楽園のようなさやさんの抽象画は、花や鳥などが伸びやかに描かれ、「音を奏でる絵」とも評されます。「3歳で北九州から福智町に移り住み、緑の美しさに魅了されました。その記憶や福智への愛が、作品に投影されているのかもしれません」。

病気にかかったことを、さやさんは「病を得た」と表現します。「いつ意識を失うかも分からぬ今、自分が見えない力や深い愛に包まれて生きていることを日々感じています。ふだん

絵を描くときは、クラシックやヒーリングミュージックなど好きな音楽をかけること。穏やかで神聖な空気がさやさんを包みます。



握力の弱い人でも握れるユニバーサルデザインの絵筆を使用し、想いを描くさやのりこさん。「描く前は何もイメージしていないんですが、キャンバスに向かうとモチーフや色が浮かんてくるんです」



南国の花嫁(TropicalBride)

URL <http://sayanoriko-art.jp/>
Facebook <https://www.facebook.com/sayanoriko>

<プロフィール>

●さやのりこ

福智町在住。2006年に脊髄の異常で神経に障害が起こる難病「脊髄係留症候群」を発症。手足の麻痺と闘いながら画家として活動を続ける。

第7回視覚芸術ユーロアメリカン展2012(場所:ペルー共和国クスコ市立美術館及び国立大学サンアントニオアバドのインカ美術館)特別招待作家として受賞。

国際博覧会「第7回視覚芸術ユーロアメリカン展2012」に出展した「南国の花嫁(TropicalBride)」をペルー共和国クスコ市立現代美術館に寄贈。作品は永久保存となる。他、国内外で活躍の場を広げている。

どんな状態であっても、必ず希望の光はあると語るさやさん。絵を待つ人のために、見知らぬ誰かのために、愛と光を宿したその手で、さやさんは今日も絵筆を握ります。